人権教育だより

京丹後市立大宮中学校
令和４年１２月１４日
No.9

１２月７日　大宮中学校人権意見発表会＆講演会

人権のつどい

大宮中学校では、１学期は「いじめ」について、２学期は「障害のある人の人権」について学習しました。その学習での学びを、作文としてまとめました。その中から各学年を代表して １ 名ずつに、自分の考えを発表してもらいました。また、１年３組岡田芽依さんには、令和４年度全国中学生人権作文コンテスト京都大会で京都府人権擁護委員連合会長賞を受賞した作文を発表してもらいました。そのあと『障がい者となってからの第二の人生』と題して、寒川進（かんがわ　すすむ）様にお話をして頂きました。二十歳の時のバイク事故をきっかけに車いす生活になった寒川さんが、当時涙した日々や、その後リハビリを経てパラリンピックで銅メダルを獲得したこと。伸びる選手に必要なことや何事も前向きに取り組む姿勢について話していただきました。

人権について、自分の生き方について、ひいては社会の在り方について考える機会となったことと思います。ほんの一部になりますが、どんなことを考え、そして学んだのかを紹介します。

第１部　人権意見発表会

発表内容の要旨

１年　松本　華さん

「バリアフリーの世界を目指して」

小学生のとき、片足が不自由な先生がおられました。その先生が来られる前に、その先生が階段を上りやすくするために新しい手すりが作られているのを私は見ていました。私は何も知らずど真ん中を友達と横に並んで歩いたりしていました。

その後、足の不自由な先生が上りにくそうに古い手すりを使って歩いておられたことに気が付きました。私はその先生の後ろ姿を見てかわいそうだなと思っていました。

この経験から私は二つのことを考えました。一つ目は物のバリアフリーについてです。物のバリアフリーは、障害のある人はもちろんだけど、お年寄りや子どもなど誰にとっても生活しやすくなります。だから、もっと増やしていってほしいと思います。

二つ目は、私が先生の姿を見て、「かわいそうだな」と思ってしまったことです。そのかわいそうは逆にばかにしているような言葉であって、その先生からすると傷つくということに今更気が

つきました。
　私はその先生がどんな思いで足が不自由になってしまって、今生活しておられるのか考えました。そこで私はこの学習を通して気がついたのが、見た目だけでこの人は足が不自由なんだな、かわいそうという見方では、その人への心のバリアをどんどん厚くしていっているだけだということです。そして、相手が求めていることを知って、その人のために私ができることを考えようという気持ちを持つことが大切なんだなと思いました。
　私は少しでも物や心のバリアがなくなることを願い、そのために自分ができることを考えたいです。そして、社会に出ていく中でたくさんの人と出会い、もちろん障害者の人たちとも関わることがあるかもしれないので、その時にはこの学習をしっかり思い出して、その人のためのバリアフリーの力になれるようにしたいと思います。

2年　小倉　莉乃さん
みんな違う、それが個性

　私はこの人権学習を通して「個人を尊重すること」について考えた。そして、改めて自分の行動や人との関わり方を見直すことができた。
　自分が一番最初に興味をもったのは「障害者」についてだ。もし、自分が目が見えなかったとしたら歩くこともままならないのにその上で今みたいに友達と遊んだり、話したりできるのだろうか。逆に、自分がその「周りの人」となったら気を遣って何でも手伝うなど、心の中で自分と違う人、と区別してしまうと思う。しかし、普段通りに話すのを頑張ったり「自分と違うけど、それがその人の個性なんだ」と受け入れることはできると思う。みんなそれぞれ違うことを普通にする、少し別の視点から見ればいじめや特別にみることは減るし、いつも通りに話す人が増えればいいなと考えている。
　もう一つ、私が心を動かされたものがある。ヨシタケシンスケさんの書いた一冊の本だ。その本は自分と違うのが「かわいそう」という宇宙人と地球人の話。自分と同じ人が普通で、どこか一ヶ所でも違えばかわいそうとなるって、どこか違う気がすると、読んで思った。同じ環境で過ごしていないのなら、その人にとって違うのは当たり前なのだから自分が基準となって判断するのではなく、それが個性と認めた方がいいのではないだろうか。これは、人の価値観とも共通していえると思う。一人ひとり違う考え方だからこそお互いに学び合えるし交流できるのだ。その人だけの特別な個性をまわりの人たちにとって良い影響にするようにしていけば今よりもっといい社会に変わっていくと思う。だからヨシタケシンスケさんは「その違いをおもしろがって、笑い合えたらいい」と表現しているのだと気付くことができた。
　これから先、大人になるにつれて人とのつながりはさらに大切にしないといけないだろう。みんな違う、それが普通ということを心に留めて、これからもたくさんの人と関わっていければいいなと思う。